

モノを遺すことの意味¹⁾

— Radley の artefact 論をめぐって —

Social psychological approach to the relationship between
artefacts and remembering

矢守 克也*

YAMORI Katsuya

I. Radley の artefact 論

Alan Radley (1990) が、そのartefact論——以下、本稿では、artefactを「モノ」と訳出する——をもっともまとまった形で展開しているのは、集合的想起に関する著名な書物 (Middleton & Edwards, 1990; p.46-59) においてである。まずは、その内容に耳を傾けてみよう。それは、下記の通り、1項～5項の5つのパートから成る。なお、各項に付した英文題目はオリジナルのタイトルであり、本文の訳文に付した頁数表示はすべてRadley (1990) における頁数である。

1. はじめに (Introduction)

Wertsch (1985) のようなごく一部の例外を除いて、モノは、記憶に関する心理学的研究の対象から除外されてきた。たしかに、Bartlett (1932) による先駆的な研究に端を発した「想起」への注目は、記憶の社会構成的側面 (social construction)、言語交通的側面 (discourse) へと研究者の目を向け始めた。Edwards & Middleton (1987) の論文はその代表例であるし、わが国でも、いち早く、佐々木 (1996) がそうした動向を摂取し、独自の研究を展開している。ここに至って、記憶を、過去に関する情報の個人的貯蔵とそこからの個人的再生と見なす伝統的視点は、完全に時代遅れとなったと言えるだろう。

しかし、「こうした最新の研究動向も、想起の営みをモノ——自然物と、何らかの文化的実践によって作られた人工物と、その両者を含む——との関連においてとらえようとする視点を欠き、会話の産物としての記憶を扱うにとどまっている」(p.46)。想起や記憶を言語、あるいは、言語的交通に還元してしまうと、記憶とモノに関わる実に興味深い問題を看過してしまうことになる。例えば、自宅にあるさまざまなモノが有する連続性 (端的に言えば、いつものテ

レビがいつものようにいつもの場所にあること)は、われわれの記憶の連続性や、活動の安定性(いつものように手を伸ばせばテレビのスイッチに手が届く)を担保している。これは、一見自明のこと、あるいはとるに足らないことのように思われるかも知れない。しかし、例えば、阪神・淡路大震災後、長年住み慣れた家を離れて慣れない仮設住宅に移り住んだ高齢者が、孤独や不適応を訴え、同時に、玄関、風呂やトイレの扉付近でつまづいて負傷する例が続出したことを想起すれば、モノが人間の記憶や活動とともに一つのシステム体を成しており、記憶とモノとを切り離して議論することなどできないことが直ちに了解される。このような基本視点に立って、Radleyは、「われわれが何をどのように記憶するかは、物質的な形式においてもとらえることができる」(p.47)、よって、「こうした議論を展開するためには、社会的生活においてモノが果たす役割を検討し、かつ、それらが人々の個人的あるいは集合的過去とどのように絡まりあっているのかを明らかにしなければならない」(p.47)と宣言する。

モノと記憶との関係は、さしあたって、2つのレベルで考えておくことができる。第1は、個人的な所有物と記憶との関係である。個人的な所有物(持ち物)に関する研究によれば、モノは個人とその人物にとっての過去を結びつけ、ひいては、その人物のアイデンティティ形成・維持に寄与する。つまり、モノには、個人的なmemorabilia(記憶すべきこと)を同定する機能があり、この傾向は高齢者ほど顕著である。第2は、社会的な記念物と記憶との関係である。典型的には、博物館(記念館)、および、そこに所蔵されたモノは、そこを訪れる人々に対して、過去(あるいは、社会の記憶)を知り学ぶための特殊なモノとして映じるであろう。このとき、そうしたモノは、一見、多くの人々に同じ記憶、同じ想起を強要するように思われるかもしれない。しかし、そうではない。われわれは、同じモノに対して異なった反応を示し、また、異なった感覚をもちうる(この点は非常に重要であり、あらためて4~5項で後述する)。

あわせて、モノと記憶との関係について、「人(主体)がモノ(客体)を記憶する」という旧来の図式は棄却されるべきことを、ここで強調しておこう。モノと記憶とが分かちがたいというRadleyの主張も、特定のモノが特定の記憶を喚起することがあるといった常識的な線で了解されてしまうならば、それは、旧来の主客二元論の枠内でモノの重要性を顕揚しているに過ぎないことになる。そうではなくて、Radleyは、人とモノ(主体と客体)との関わりが総体(以下、この総体を〈記憶システム〉と呼ぶことにする)として記憶される——どこに?もちろん、主体と客体から成る〈記憶システム〉全体に、である——ことを提起しているのである。主客二元論を脱却したシステム論的思考が、Radley理解には必須である。「記憶はどこにあるのか」という問い自体が、実体的な記憶観を残存させたものとして封殺されねばならない。記憶や想起は、〈記憶システム〉の機能なのである。

さらに、〈記憶システム〉におけるモノと(狭義の)記憶との融合には、意図的なものと非意図的なものとの存在することにも注意を払っておこう。つまり、一方に、何ごとかを想起することをはっきりと意図したモノが存在する。例えば、比較的恒久的なモノとしては墓石や銘板などがあり、逆に、暫定的なモノとしては登頂記念に山頂に立てられた旗、あるいはそこに

結ばれたハンカチのごときものがある。いずれにせよ、これらのモノは、人々の記憶と想起を助ける、言わば実体的記録 (tangible record) である。しかし、実体的記録としてのモノには、上記のように意図的に設定されるものもあれば、後年になってはじめて、その保全が図られる歴史的遺物のように、偶発的にそのような性質を帯びるに至るモノもある。

これまで一貫して、意図的行為としての想起——被験者や回答者は、実験者や調査者から、いったい何度、「思いだして下さい」と言われたことだろう——に焦点を当ててきた心理学研究が、モノを記憶を呼び起こすトリガーとしてのみ遇する傾向をもったとしても不思議ではない。しかし、モノと記憶との関係は、このような狭い範囲にとどまるものではない。非意図的な形で、(狭義の) 記憶と連合したモノをも含め、モノと (狭義の) 記憶が相補的に再構成されることによって織りなされる〈記憶システム〉全体をとらえる視点が、今後重要である。

2. 時間と場所に埋め込まれた記憶 (Memory in time and place)

実験室を離れてしまえば、人々の記憶は、孤立した個別的記憶などではなく、当然にも、彼らがそこに住むコミュニティ、ともに暮らす家族、あるいは、一緒に働く職場の人々など、多くの集合体の中で生まれ保持されている集合的な記憶が中核となる。そして、こうした集合的記憶の背景にも、モノは控えている。これは、単体としてのモノがある個人 (たち) に、特有の記憶を誘発するといった単純な関係を指しているのではない。そうではなく、集合体の特性に応じた集合的記憶が、それぞれ異なるモノ的環境と結びついて一つの〈記憶システム〉を成して個々の集合体に存在しているということである。言いかえれば、集合体が異なれば——例えば、ヒロシマの当事者から成る集合体とそうでない人々から成る集合体とを対照してみよ——、そこには、異なる種類の集合的な〈記憶システム〉(人々とモノから成る) が存在すると理解されねばならない。Radleyは、このことを、Lalivie d'Epina y (1986) による実証的研究を引用しつつ例解している。

また、〈記憶システム〉は、当然にも「過去」の感覚と密接に結びついている。よって、〈記憶システム〉はまた、人々の「過去」、すなわち、自伝的なアイデンティティをも大きく規定することになる。この意味で、人生の多くをすでに過ぎ去った過去において生きてきたとの感覚を有するであろう高齢者においては、〈記憶システム〉が特に重要な意味をもつことになる。そして、過去と現在とを連結するモノの重要性も、高齢者においては、よりいっそう増すことになる。過去とともにあるモノの多くは、現時点においては、それらが獲得された時空間から分離されているわけだが、こうしたモノに息吹を (再び) 与えるのは、モノを対象とした現時点における会話 (discourse) である。会話の対象となることによって、モノは、その意義を回復する。同じことは集合レベルにおいても言えるから、このような意味でのモノは、個人レベルでは老いて亡くなった肉体の代替物となり、他方、集合レベルでは文化の代替物ともなりうるということが出来るだろう。

3. 共同収集される過去 (The past collected together)

モノは、内的な記憶を誘発する外的な実在のように見える。たしかに、あるモノが、単体として、ある種の内的な記憶や想起を誘発・喚起する一面はあろう。しかし、これは、モノと想起に関する極めて一面的な見方でしかない。むしろ、モノは、物質世界の一斑となって——言い換えれば、他のモノたちと複雑なネットワークをなしながら——、個人的な神話、あるいは社会的なイデオロギーを安定的に懐胎する〈記憶システム〉を成していると理解されねばならない。例えば、Hawes (1986) が明解に示したように、合衆国においては、燭台、鍋、斧とくれば、それらは、ほぼ例外なく、人々に開拓者たちの生活を想起させ、かつ、それらのモノは、西部開拓史という特定の歴史観、イデオロギーと一体化となって存在している。つまり、これらのモノと歴史(記憶)は、双方が互いに他を陰陽に支持しつつ一つの〈記憶システム〉を成している。単に、燭台というモノが、ある種の記憶を保持・喚起するのではない。いくつかのモノから成るモノ的世界の総体が、ある種の文化、歴史と一体化して存在しているのである。

Kavanagh (1989) の言明——すなわち、社会的想起は、単にモノによって喚起されるのではない。それは、モノの世界がどのように秩序づけられているかに依存する——は、この意味において理解されねばならない。さらに、何を目立たせるか (singularization)、あるいは、モノを移動させること (displacement) が重要となるのも、この意味においてである。なぜなら、顕示的なモノ (目立つモノ) と潜在的なモノ (目立たないモノ) との闘争は、そのまま、イデオロギー上の葛藤、対立の再現であるし、モノの移動は単なる空間的移動にはとどまらず、多くの場合、それが置かれた社会的コンテキストの変更を伴うからである。Radleyは、貴重な、したがって、しばしば高価な美術作品の所有者の変転を事例に、こうした問題について論じている。

4. 記憶の製作ということ (The making of memories)

モノは、その相対的に強い永続性によって、意図的あるいは非意図的に、それがかつて埋め込まれていた〈記憶システム〉を維持、あるいは、再興発する力を有している。モノを意図的に活用するのは、それによって集合体間の社会的あるいは文化的差異を際立たせようとする場合が多いが、個人的な活用もありうる。例えば、死に直面している個人が自ら、あるいは、近親者の死に際した遺族が、その所有物 (遺品) を取り扱う場合である。このようなケースでは、当該の人物について、何を記憶し、また何が記憶されるべきかという議論と並行して、モノの保存、所有者の移管 (寄贈、相続など) が問題として浮上する。死に際した人々が、特定のモノを特定の人物に託す行為も、モノの受領者に、当該のモノが懐胎するコンテキスト、〈記憶システム〉を伝達することを意味しよう。もっとも、与え手が意図した通りの内容で、当該の〈記憶システム〉が受け手に伝達されることは、むしろ例外的である。モノが移動 (displacement) された以上——モノの所有者の変更は最大のdisplacementと言ってよい——、〈記憶システム〉の変容は不可避だからである。結論として、モノは、意図性——特定の記憶を懐胎させようとする意図——と非意図性 (偶然性) の微妙なバランスの中で、記憶との関係を取り結ぶことに

なる。

Radleyはこの点を特に強調し、小説「星の王子様」の一節を素材にその例解に努めた後、次のように結論づけている。「(心理学的研究においては) 何らかの行為がなされた時、その時、その場所にあったモノは、たまたまそこにあったと考えられがちである。しかし、これまで述べてきたことを踏まえれば、この考えは間違いだということがわかる。そこにおいて行為が展開されるモノの世界は、常に、特定の文化、価値を懐胎し、それによって整序された世界である。それは、かつて、Bartlett (1932) が想起の基本様式を決定づけると考えた『組織化された世界』なのである」(p.55)。具体的なモノによって満たされた具体的な時空間でなされない行為などありえないが、心理学は往々にしてこの自明な事実を看過してきた。われわれは、注意深くモノに記憶を託す存在であると同時に、たまたまそこにあったモノにすら、その行為の意味内容を規定される存在なのである。このことがあらためて銘記されねばならない。

さらに、Bartlettにおいては、モノはイメージ(という内的構成物)を通して記憶に影響すると想定されるが、その内的イメージなるもの自体、何の制約も受けずに自由に形成されるはずもない。それは、社会文化的体系において、当のモノが占めるシンボル価に、少なくとも一定程度は依存している。さらに、モノは、独立した知覚者たるヒトの前に現れるのではない。人々は、その相互作用——典型的には、モノをめぐる会話、モノの場所の移管——を通して、モノのシンボル価を変え、ひいては、モノに対する内的イメージを変容させていく。裸のモノが、ヒトの前をたまたま通り過ぎるといった構図などありえない道理である。人々は、常に、モノやそれが置かれたコンテクストをre-frame(再定義)し、re-order(再整序)し続けている。博物館は、ヒトの心の中に存在するわけではないのである。よって、例えば、現在単なる実用品として存在するありふれたモノ(例えば、金槌)も、それが現在果たしているさまざまな日常的機能を中核とする定義づけとはまったく異なるコンテクストを将来獲得して、何らかの記念物として機能する可能性も十分にありうる——当然にも、金槌自体の外見には何の変容がなくてもである。

Radleyは、ここまでの議論は個人的な所有物にすら該当するのであるから、まして、公共のモノ(例えば、公共建造物や自然環境)においては、モノと記憶との密接な関係がより先鋭化して表れると論じる。典型的には、それは、歴史認識にまつわる対立となって表れる。したがって、「保存に値すると考えられている種々の貴重な建造物、あるいは、何らかの歴史的関心の的になっている建造物の扱いは、単に、モノとしてそれらが有する機能に手を入れる(例えば、日常的な機能を奪い博物館化するなど)ことを意味するにはとどまらない。それがその一部をなしている『過去』——ある人々にとっては愛着の対象となるような『過去』、あるいは、別の人々にとっては排撃の対象となるような『過去』——を生産(構成)することを意味するのだ」(p.57)。記憶や想起を、そして、過去というものをモノとともに考えることは、それらが、けっして個人的な心理過程によっては解き明かせないことをわれわれに気づかせてくれる糸口ともなっているのである。

5. まとめ (Concluding remarks)

これまで述べてきたRadleyの主張を集約する意味で、本節については、彼の記述を全訳しておこう。

これまで、記憶、想起とは、言葉の世界で起こる出来事であると同時に、モノの世界のただ中で起こる出来事であることを強調してきた。モノは、社会・文化全体に関わる記憶においても、個人的な記憶においても、重要な役割を果たす。記憶が社会的な事象であるのは、単に、人々が共同で想起活動に従事するからではない。また、単に、人々が過去に起こった出来事について会話するからではない。これまで述べてきたように、こうした事実は、記憶を構成する重要な側面ではあるが、それだけでは、記憶がそこにおいて生まれ、また消えていく包括的な場の全体（本稿に言う〈記憶システム〉のこと（訳者））をカバーしきれてはいない。モノは、その永続性——通常、モノはその製作者を超える寿命を有する——に負うて、製作者の努力や理想を、当人の死後にも体現し続ける記念物（モニュメント）となりうる。しかし、まさにモノがもつこの性質のために、それは、その製作者や所有者の意図を離れて、別の意味を懐胎し、過去に関する別の解釈を（再）構成する根拠ともなりうる。モノがもつこうした性質——書字記録も、この性質の幾分かを共有している——によって、モノ（記念物）は、過去のシンボルとして独特の性質を有するにいたる。通常、社会は、この点に関して、それぞれに異なる文化、慣習をもっている。例えば、現代社会は、物質的資産の所有とそれを消費するパワーの点で大きな階層差を有する社会であると言える。その結果として、過ぎ去った過去を想起する潜在力を有するモノに対する関係性の点で、人々は、大きな階層差、グループ間格差を有していると言えよう。

本論文では、個人レベルでも集団レベルでも、それぞれのモノがもつ機能は変化しうることを前提としてきた。昨日の実用品は、明日には博物館の所蔵物となりうる。もっとも、実用品から記念物への移管がなければ、それは、それが有したかも知れない特別の意味が見いだされないうちに無用の長物として放擲されていたかもしれない。このような日常的な、あるいは、曲線的な機能変化とは対照的に、モノが記憶に対してもつ機能に関して、特定の方向性への変化を意図的、人為的に誘発することも可能である。こうした例としては、フランス革命にともなう王宮所蔵物の処理例が典型的である。言いかえれば、モノの保存については、ある種の記憶との関連性を考慮して慎重に吟味して取捨選択することも可能だし、この関係性の変化を偶然に委ねることも可能である。この後者の側面は、モノが、多種多様な、一見すると些細とも思える実用的、具体的価値をもつことに由来する。モノがもつこの性質のために、直接的には無価値と思われるモノでも、多くの人々と実に多様な関係を取り結ぶことができるのだ（Miller, 1985）。この結果、モノが日常的に多種多様に利用、消費される中で、そして、それらのモノに対して人々がさまざまな関係を保つ中で、モノは、後日、多種多様に想起され、再構成されうる存在へと転化していく。このように考えれば、思想や言語の抽象的、普遍的影響

力と比較して、モノがそれらに及ぼす現実的、具体的影響力が過小評価されてきたとするMiller (1985) の指摘も、納得がいくものとなろう。

(Radley, 1990; p.57-58.)

Ⅱ. モノと想起の現場から—— 神戸、そして、ならまち ——

I節では、Radleyによるartefact論の概括的介绍を通して、記憶とモノの関係について論じてきた。以下、本節では、これまで論じてきたことを、現実的な事例——被災都市・神戸と歴史都市・奈良におけるモノと記憶との関わり——に則して具体的にとらえかえてこう。本稿では、2つの点に焦点をあてることにする。第1は、モノが放つオーラという視点であり、第2は、〈大きなモノ〉と〈小さなモノ〉との対照という視点である。

1. モノが放つオーラ

神戸市中央区に、「グループ117 (代表：長谷川忠一氏)」という語り部グループがある。避難所や仮設住宅の運営で得た教訓を語り継ごうというねらいで代表のもとに集まった数人が中核メンバーである。グループは、月1回のペースで勉強会を開きながら、要請のあったところへ出かけては、震災の語り部として自分たちの体験談を話している。図1は、神戸港震災記念公園での活動のひとつである。筆者は、1999年のグループ発足以来、このグループの活動に副代表として関わりながら、集会的記憶の動態について社会心理学的に検討してきた (Yamori, in press; 矢守, 2001aなど)。

さて、80歳代のメンバーAさんは、地震直後、路上で憔悴しきった自分を新聞記者が撮った一枚の写真、その新聞記者が見かねて連れていってくれた先の病院で手首に巻かれたビニールテープ (そこには、Aさんの氏名と11という診察整理番号がマジックで書かれている)、および、その後、ようやくのことで入手した治療薬の入った薬袋——こ



図1 「語り部グループ117」の活動風景 (神戸港震災記念公園にて)

れらのモノを大切に保管している。そして、Aさんの体験談は、これらのモノを軸にして進む。Aさんの話を聞く者はみな、今、目の前で話をしてきている穏やかな老婦人と、髪を振り乱し、相当にやつれた様子の写真の中のAさんを見比べざるを得ない。そしてまた、いくぶん変色した黄色のビニールテープや、1月23日という日付とAさんの氏名が記された薬袋を目の前にしながら、訥々とした、それでいて、執拗に繰り返される苦労話を聞くと、それらの何

でもないモノたちに、いったいどれほどの思いが込められているのだろうかと思像し慄然とする。

「こんなもん、手に巻かれてなあ、(診察の) 順番来るの、待ってました…」

「その後、(神戸の) 西の方の病院行って、(薬を) やっともらえたんです」

いや、むしろ、それらが、ごくありふれたモノだからこそ、われわれの日常生活においてもふつうに見られるモノだからこそ、かえって、その何でもないモノから、万感をこめた言葉を紡ぎだすAさんの思いに、われわれは慄然とする。

Aさんのモノ語りに登場する何でもないモノとは、要するに、日常生活において、その意味(「ソレは～である」)が明らかであるようなモノである。ビニールテープは、文具の一種の、あのビニールテープであり、薬袋は、病院や薬局で受け取る、あの薬袋に他ならないのであって、それ以外の何ものでもない。何でもないふつうのモノとは、日常生活でそのような存在と化しているモノのことである。ところが、Aさんのモノ語り——より正確に記せば、ビニールテープや薬袋に対する一種異様なこだわり(富山(1995)も参照)——は、そのようなふつうのモノに、「ソレはビニールテープである」だけでは済まされない何ものかが付随しているという感覚を、われわれに喚起する。筆者の考えでは、このとき、この感覚こそが、Aさんを見舞ったあの出来事へとわれわれを辛うじて運び、体験の風化をくいとめる媒体ともなっている。

では、Aさんのこだわりが聞き手に喚起した感覚によって、何が聞き手に伝わったのだろうか。このことを考えるためには、ひとつ重要なポイントをおさえておかねばならない。それは、われわれが、そのビニールテープを、「ただのビニールテープ」ではなくて、「Aさんの思いがぎっしりつまったビニールテープ」だと認識するがゆえに、そのビニールテープが体験の記憶・伝達に資するのではないということである。そうではなくて、われわれが慄然とするのは、Aさんの果てることのないこだわりが、モノ——それが、どんなに陳腐で、どこにでもあるようなモノであっても——の意味(「ソレは～である」)は、実は無限に開かれているということ、われわれに開示するからなのである。

もう少しわかりやすく言いかえよう。モノにオーラ(畏怖の念)を感じるということがあるだろう。例えば、森を歩いていて、ふと、得も言えぬ不気味な気配を感じたり、古えの人々が使った台所道具を見て、「何千年も前にコレを実際に使って、ここで煮炊きをした人たちがいるんだ」といった種類の、何とも表現できない感慨に襲われることがある。Aさんのビニールテープのモノ語りにわれわれを感じる凄みは、モノの背後に、この種のオーラを感じるからに他ならない。言いかえれば、目の前の、ごくふつうのビニールテープに、まっさに見えている現象のすべてには還元しつくせないものが含まれていることを、われわれが直観するからなのである。「これがすべて」とは言い難い、「得も言われぬ」としか表現できない残余がモノに宿っていることが、オーラ(畏怖)の原因である(大澤,2000)。

災害を風化させ、それを過去のこととして忘れさせることによって人々が得ているのは、——

あたりまえのことを言うようだが——人々の日常生活である。日常生活とは、言いかえれば、森がただの森になり、ビニールテープがただのビニールテープになるような生活、言いかえれば、オーラのない（正確には、オーラを忘れた）生活である。この意味で、Aさんのモノ語りは、その日常生活でごくふつうに見られるモノを起爆剤として、そこにオーラを回復することによって、人々をして、あの出来事へと回帰させようとする営みなのである。他方、もちろん、ありふれていないモノ——例えば、世界に2つとない地震の物理的痕跡（淡路島北淡町野島断層面）やさまざまなモニュメントなど——を通して体験を継承する試みもありうる（この点については、震災モニュメントマップ作成委員会・毎日新聞震災取材班（2001）や、矢守（2001b; 2002）を参照されたい）。よって、以上のことを前節で要約したRadleyの論議にしたがって整理すれば、断層面やモニュメントによる体験伝達が意図的なモノの利用に対応し、Aさんのモノ語りは、〈記憶システム〉の非意図的かつ偶発的な構成自体を、あらためて意図的にとらえかえすことによって営まれている活動であると位置づけることができるだろう。

2. 〈大きなモノ〉と〈小さなモノ〉

前項で取りあげた語り部グループの活動で体験した別のエピソードから論を起こしたい。ある日、小学生を対象とした活動の最中、次のような出来事があった。語り部らがそれぞれの被災体験を語りながら神戸市内の被災地跡を小学生と一緒にめぐり歩いた後、一行は、最後に「阪神大震災慰霊と復興のモニュメント」（神戸市中央区）を訪れた（図2を参照）。このモニュメントの地下部には、神戸市内で亡くなった犠牲者約4500人の氏名が記されている（図3を参照、後方に犠牲者の氏名が記された銘板が見える）。それを女性の語り部の一人が指さした。指示した先は、女性の長女の氏名であり、その日、その女性は、自宅の全壊で重傷を負った長女を震災から数週間後に亡くすまでの経緯を、子どもたちにずっと語ってきたのであった。

その瞬間の子どもたちの反応は、実に注目すべきものであった。一瞬、ざわめきが止まり、皆の視線が一斉に女性の顔とモニュメント上の氏名との間を揺れ動いたのである。銘板に記された犠牲者のリストは、それをリスト全体として見れば、「被災者」という「類型」を可視化する。しかし他方で、その中に記された個々の氏名は「固有名」に他ならない。実際、この女性は、その日、阪神・淡路大震災という「類型化」された出来事、あるいは、震災犠牲者という「類



図2 「阪神大震災慰霊と復興のモニュメント」（神戸市中央区）

型化」された人間についてではなく、一人の具体的な人間（女性の長女）についてずっと語ってきたのであった。つまり、このとき、子どもたちは、「類型」の中に一つの「固有名」が浮上する瞬間に立ち会っているのであり、逆の見方をすれば、この女性の切々たる語り、ひいては、その語りの基盤となる彼女に固有の体験が「類型化」を被った瞬間を垣間見ているのである。



図3 図2のモニュメントの地下部
（犠牲者の氏名が記された銘板が後方に見える）

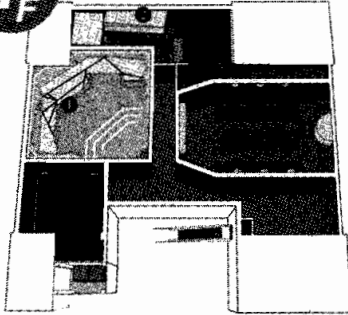
そのことがもたらす衝撃が、子どもたちをしてかかる身体反応を惹起せしめたのである。

重要な点は、ここで観察されている「類型化」と「固有名」との対立（あるいは、相補）の構造は、そのまま、公共的で標準的な歴史を表現する〈大きなモノ〉（上記の例では、慰霊のモニュメント）と、箇々に固有の人間の生を象徴する〈小さなモノ〉（上記の例では、個別名が刻まれた銘板）との対立（あるいは、相補）の構造と並行関係をもっているということである。荻野（2002）らが指摘するように、今日、多くの博物館において、「類型化」と「固有名」という2つの用語で象徴される2つの矛盾するコンセプトに基づく事業・展示が展開されているが、その基盤には、多かれ少なかれ、上記の意味でのモノに関する対照性が横たわっている。戦争、災害、事件・事故など、理不尽に人々の命を奪った出来事を記憶にとどめるべく建てられた慰霊碑は——特に、そこに個々の犠牲者を指示するモノが組み込まれている場合——、ここで論じている対照性が最も明確に顕現するケースとなる。慰霊碑だけではない。阪神・淡路大震災に関わる事例に限っても、例えば、震災全体を念頭に置いたと考えられる慰霊碑と、被災地内の各所に建設された無数のモニュメントとの関係、あるいは、2002年4月にオープンした「人と防災未来センター」の建物本体と、そこに所蔵・展示されている個別的な遺品の数々との関係——これらにも、〈大きなモノ〉と〈小さなモノ〉との関係を見てとることができる。図4は、同センターのパンフレットの一部を転載したものである。センター全体、あるいは、「1. 17シアター」が〈大きなモノ〉として機能する一方で、「震災を語り継ぐコーナー」、「震災の記憶をのこすコーナー」などに、〈小さなモノ〉の可能性が託されていることがわかる。

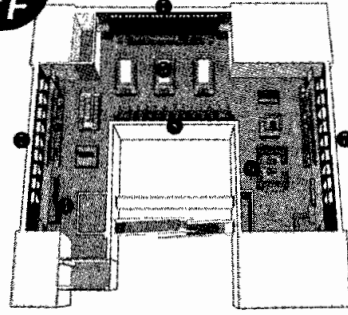
筆者は、〈大きなモノ〉と〈小さなモノ〉との対照的關係を単に望ましくないものとして排撃しているのではない。こうした対照性は、当初から普遍性を帯びて起きる出来事が存在しない以上——すべての現実的な出来事は特定の時空間において生じるのだから——、ある意味で、不可避のものである。だから、大切なのは、〈大きなモノ〉と〈小さなモノ〉とをいたずらに

展示のご案内

4F 阪神・淡路大震災を映像で伝えます。



3F 阪神・淡路大震災を
実物資料・詳細データで伝えます。



① 17シアター
地震発生により崩壊していくビルや高速道路の様子を大型映像により伝えます。



② 震災直後のまち
震災直後の様子を大規模な映像により伝えます。



③ 大震災のあとも
震災後のまちの様子を伝えます。



④ バーコード・ナビゲーター
展示物の解説やそれにまつわる体験談等を表示する携帯端末を貸し出します。



⑤ 震災からの復興をたどるコーナー

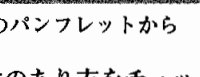
地震直後から復興に向けての人々の暮らしやまちの姿について、それとリンクスを出し、グラフィックや映像により解説します。



⑥ 震災を語り継ぐコーナー
震災の語り継ぎの場を設け、被災者の体験談や復興の物語を伝えます。



⑦ 震災の記憶をのこすコーナー
震災の記憶をのこすコーナーを設け、被災者の体験談や復興の物語を伝えます。



⑧ 震災からの復興をたどるコーナー
震災からの復興をたどるコーナーを設け、被災者の体験談や復興の物語を伝えます。

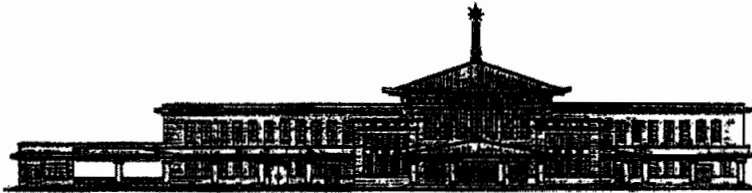
図4 「人と防災未来センター」のパフレットから

対立させ相互に遮断することなく、常にその関連づけのあり方をチェックし、必要とあらば更新し続けようと努力を積み重ねることである。「人と防災未来センター」をめぐるでも、個人的な遺品の収集、公開にあたっては、その是非、形態、場所などについて、多くの議論が交わされつづけている。神戸だけではなく、同じ震災に見舞われた淡路島でも、「北淡町震災記念公園」(矢守, 2002)では、〈大きなモノ〉としての活断層面が提示されるのみならず、地元の被災者が、例えば震災直後に自ら描いた絵など〈小さなモノ〉を手に語り部活動を始めている。ヒロシマでも、ナガサキでも、記名された遺品の展示が、被爆体験について、それがなければ決して再生されえなかったであろう現実を来館者の前に提示している。さらに、今日の、いわゆる廃墟ブーム(例えば、栗原(2002)を参照)も、〈小さなモノ〉への関心と結託した往時の生活感覚へのこだわりが、廃墟という〈大きなモノ〉への関心を動員していると思わしう限

English
Deutsch

の保存・再生を!

御意見のある方へ **Our Forum** 生かす会からのニュースも入っています。



奈良駅舎の基本計画図

JR奈良駅舎は保存されることとなりました。
去る9月17日、奈良県は記者会見し、奈良市、JR西日本と3者協議した結果、
なら駅舎を身置によって、保存することとしたと発表しました。奈良市はこれを受け、
この駅舎の保存活用を進めて行きたいと発表しました。これで奈良にも貴重な
近代建築の遺産が一つ残されたことになり大変喜んでおります。ご協力い
ただきました皆様および関係者の皆様にお礼を申し上げます。
(JR奈良駅舎を生かす会)

図5 「JR奈良駅舎を生かす会事務局」のホームページ・トップ(2001年10月12日付)から

りでは、ここでの議論と同じ方向性を有していると言えよう。

最後に、以上述べてきた視点に立って、ならまちに関わる動きを展望してみよう。重要な点は、ならまちの再生を期する人々(例えば、「(社)ならまちづくりセンター」や、「JR奈良駅舎を生かす会事務局」によるさまざまな取り組み)が、伝統的な風景・景観を守り育てる運動と、「まちづくり交流」と称する人的交流活動とを並行させている点にあると思われる。こうした戦略は、2つのモノの相補性をはっきりと念頭において展開されていると見ることができる。すなわち、昔ながらのオモチャや道具を用いた小さなイベントのような〈小さなモノ〉への関心とこだわり、ひいては、それらのモノと一つの〈記憶システム〉を成す人々の諸活動全体への関心とその再構築なくして、〈大きなモノ〉(例えば、JR奈良駅舎(図5を参照))が単体として保全されることは困難だということを、ならまちに関わる人々は十分に認識していたと言えるだろう。

【注】

¹¹ 本研究は、平成12年度奈良大学研究助成を受けて実施された。

【文献】

- Edwards, D. & Middleton, D. 1987 Conversation and remembering: Bartlett revisited. *Applied Cognitive Psychology*, **1**, 77-92.
- Hawes, E.L. 1986 Artifacts, myths and identity in American history museums. (In) V. Sofka (Ed.) *Museology and identity*. ICOFOM Study Series, **10**, 135-139.
- Kavanagh, G. 1989 Objects as evidence or not? (In) S.Pearce (Ed.) *Museum studies in material culture*. Leicester: Leicester University Press.
- 栗原 亨 2002 廃墟の歩き方——探索篇—— イースト・プレス
- Lalive d'Epinary, C. 1986 Time, space, and socio-cultural identity: The ethos of the proletariat, small owners and peasantry in an aged population. *International Social Services Journal*, **107**, 89-104.
- Middleton, D. & Edwards, D. 1990 *Collective remembering*. London: Sage.
- Miller, D. 1985 *Artefacts as categories: A study of ceramic variability in central India*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 萩野昌弘 2002 文化遺産の社会学——ルーヴル美術館から原爆ドームまで—— 新曜社
- 大澤真幸 2000 〈不気味なもの〉の政治学 新書館
- Radley, A. 1990 Artefacts, memory, and a sense of the past. (In) D. Middleton & D. Edwards (Eds.) *Collective remembering*. London: Sage. p.46-59.
- 佐々木正人 1996 想起のフィールド 新曜社
- 震災モニュメントマップ作成委員会・毎日新聞震災取材班 2001 阪神・淡路大震災 希望の灯りともして…… —67人の記者が綴る158のきずな— 六甲出版
- 富山一郎 1995 戦場の記憶 日本経済評論社
- Wertsch, J.V. 1985 *Vygotsky and social formation of mind*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 矢守克也 2001a 災害体験の記憶と伝達 やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編)「カタログ現場心理学」金子書房 第14章
- 矢守克也 2001b 記憶と記録の社会心理学VI——「モニュメント・ウォーク」の試み—— 日本社会心理学会第42回大会発表論文集, 138-139.
- 矢守克也 2002 博物館における震災体験の記憶と伝達——「北淡町震災記念公園〈野島断層保存館〉」をめぐって—— 奈良大学大学院研究年報, **7**, 41-68.
- 矢守克也 2003 4人の震災被災者が語る現在——語り部活動の現場から—— 質的心理学研究, **2** (印刷中)
- Yamori, K. in press. The way people recall and narrate their traumatic experiences of a disaster: An action research on a voluntary group of story tellers. (In) Kashima, Y., Endo, Y., Kashima, E., Leung, C. and McClure, J. (Eds.), *Progress in Asian Social Psychology*, Vol.4. Seoul: Kyoyook-kwahak-sa.